

濱田道仁氏は出張所の責任者であったが、ノソング会長との関係を考慮して、あえて「所長」として任命されておらず任期は3年であった。1989年5月1日、本部の人事が発表され、コンゴブラザビル出張所4代所長として高部正雄氏が任命された。しかしノソング氏は、その人事を受け入れなかった。表だった理由としては「新所長はフランス語ができないから」というものだったが、これまでも述べてきたように、ノソング氏は、教会内に置かれた海外布教伝道部（現在の海外部）の出先機関である出張所の存在を快く思っていなかった。コンゴにおける天理教の代表と自負していた彼は、「コンゴには二人の長は要らない」とよく口にしていた。また、出張所長は教会における彼の地位を脅かす存在と映っていたのかもしれない。ただ、コンゴ伝道には日本人布教師が必要であると認めていたので、出張所長は必要ないが自分の手足となって動く若手の青年の派遣は常に願っていた。教会と出張所の違いを彼に説明するが、なかなか理解してもらえなかった。

本部側としても、もちろんノソング氏のこうした返事は受け入れられない。また、日本人の若者をノソング氏の指揮下に置くことも承知できない。ノソング氏が本部との話し合いの成り行きによっては、その日本人を「人質」として盾に取ることも危惧された。実際、日本人布教師がノソング氏にパスポートを取り上げられ、予定通りに出国ができないということもあった。

こうして人事発令から2ヶ月余り、膠着状態が続いた。事態打開のため7月14日から4日間の予定で、篠森靖人海外布教伝道部長がコンゴを訪れ、ノソング氏との話し合いがもたれた。しかし、結局双方の折り合いはつかず、最終的にコンゴブラザビル出張所を一時閉鎖することが決定された。この決定に対してノソング氏は、出張所員であった二人の若者だけは残すように申し出たが、聞き入れられなかった。すると、閉鎖の決定は海外布教伝道部の勝手な決断であり、本部の意志とりわけ真柱の意志ではないと言出し、真柱をはじめ本部関係者にその真意を確認する電報を送った。彼にとって日本人がいなくなるのは大きな痛手となることは明らかであった。布教伝道や鼓笛隊などの諸活動、また教会の会計、本部との連絡においては、日本人の存在は欠かせなかった。しかも、日本人の存在はコンゴ社会に対する一つの彼自身の信用となり、教会における彼の地位を保証するものでもあった。

出発は8月13日と決められた。閉鎖の決定を受け、出張所では帰国の準備を急いで始めなければならなかった。鼓笛活動の実質的な責任者でもあった私は、活動の後任探しや内容の引き継ぎに追われた。また出張所内にある様々な書類や備品の整理にも多くの時間を要した。こうした慌ただしい生活の中で、8月7日、ある事件が起きてしまったのである。

当時のコンゴ社会では出国に際しては、外国人でも「出国ビザ」の取得が義務づけられていた。そしてそのためには必要書類と旅券を持って、移民局で手続きしなければならない。またそのビザ申請には、天理教の現地代表者であるノソング会長の署名が必要だった。実際、部長がノソング氏との話し合いを終えて帰国する際、宿泊したホテルの証明書で出国ビザを申請したが認められず、ノソング氏の署名を得てビザが出されたということもあった。この話には、自分の権力を見せつけたいノソ

ング氏の裏工作があったようだが、コンゴはそういうことが可能な国でもあることが実感させられた。ノソング氏は出国の手続きを進めるということで、パスポートの提出を求めた。不安ながらも他に手段もなくノソング氏に所員全員のパスポートを渡した。ところがその後、彼は濱田氏家族のパスポートだけは返したものの、私と妻、そして二人の青年のパスポートは預かると言い出した。つまり、我々はそれ以降彼の「人質」となってしまったのである。

当初、事態はすぐに収束するかと思われたが、ノソング氏も頑なな姿勢を貫き、帰るに帰られない状況が続いた。所員全員で十二下りのお願いづとめが毎日行われた。警察に訴えたがノソング氏は知り合いも多く、裏で根回しをしていたようでなかなか関係者に動いてもらえない。こちらも数少ない知り合いを通じて警察関係者と接触してことの進展を図るが、なかなか進まない。偶然コンゴに来たキンシャサの日本大使館員を通じて、働きかけてもらったりもした。ただ数日後、当時妊娠7ヶ月だった私の妻のパスポートは返された。

この間、パスポートさえ戻ればいつでもすぐに出発できるように、飛行機の予約は常に入れていた。「全員揃ってコンゴを出る」濱田氏の決意は固く、またそれが本部の指示でもあった。あるときは「パスポートが返される」という情報を得て、調味料や残った食料などをすべて始末し、荷物だけになってパスポートの返却を待ったこともあった。しかし、飛行機の予約キャンセルができるぎりぎりまで待ってみたが、パスポートは返されることはなく、落胆の中、捨てたゴミの穴から調味料や食材を掘り起こさねばならなかった。

8月29日、ノソング氏には秘密裏に公安との折衝のためにパリ出張所から鎌田親彦所長が派遣された。そしてノソング氏に警察から9月2日の出頭命令が出された。また時間じくして、真柱からノソング氏に直接の電話があり「日本人を帰すように」との言葉があった。電話を受けたノソング氏は、ついに私たちのパスポートを返してくれた。その日は、ストライキの都合でたまたまフランス行きUTA社に臨時便があり、同航空会社の特別な計らいで全員の席が偶然にも取れていた日でもあった。出発時間が迫っていた。「1時間以内に出発できるように！」そのかけ声に皆が一斉に動き出した。ちょうど1時間後、すべての準備を終え、空港に向けて出発。こうして鎌田所長と共に無事に全員揃ってブラザビルを後にした。教会からの見送りは誰もいない出発だった。

ところで、この話には後日談がある。1989年9月19日(火)、ブラザビルを飛び立ったUTA機がサハラ砂漠の上で爆発し乗客乗員170名全員が亡くなった。リビアの工作員によるテロ事件だった。火曜日の便だけは夜行便ではなかったもので、濱田氏の幼い子どもたちのことを考え必ず予約を入れていた。ところが、バカンスの終了時期であった上、UTA社のストライキと重なって8月末から9月初旬はなかなか予約が取れなかった。翌週の5日と翌々週の12日便はすでに満席で、19日の便には空席が残っていた。もしその日の便に乗っていたとしたら、ノソング氏と天理教の縁は永遠に途絶えたかもしれない。そして、今日のコンゴ伝道の姿はなかったかもしれない。